

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」



特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「子どもが支援の必要性に気付くために」

特別支援教育では、子ども本人の思いや願いを踏まえて支援を検討する視点を大切にしています。しかし、小学校高学年以降になると、困ったことはないかと尋ねても、「困っていない」「みんなと違うことはしたくない」と言い、支援につながらないことがあります。そこで、今号では子どもが支援の必要性に気付くための手立てを探ります。

- 1 本人の意向、希望を聞き取り、困り事を整理する 参照：「実践みんなの特別支援教育 2026. 7月号」
 - ・子どもが困り感に気付けるように、次の3つの問い掛けをする。
 - ①「どうしたの？」→問題行動の背景にあるその子なりの事情を聞き出す。
 - ②「どうしたい？（どうなりたい？）」→子どもの意思を聞き出し自己決定を促す。
 - ③「何かできることはある？（どのようにすればできるかな？）」→選択肢を与えたり、一緒に考えたりして自己決定をしやすくする。
 - ・「一人一人性格や顔、得意なことや苦手なこと、学び方も違うように、あなたに合った方法を一緒に見付けよう」など、子どもが前向きに相談できる状況を設定する。
- 2 特別な支援を必要な支援（当たり前の支援）にする
 - ・授業では一人だけ使用できるツールではなく、誰でも使用してよいことにする。A4サイズとA3サイズのプリントを用意して自由に選べるようにする、計算の練習問題に取り組むときはやり切れる量に調整するなど、特別な支援を必要な支援にする。
- 3 子どもに合った支援を試し、「よかった」を積み重ねる
 - ・必要な支援を行うためには、本人が「こうすると分かりやすい、楽になる」を実感することが重要である。例えば、指示を聞き漏らす子どもに対して、座席位置を工夫する、個別に指示を出す、視覚支援を活用するなどの方法を試し、その効果を本人が実感できるようにする。
- 4 保護者の理解と協力を得る
 - ・保護者に学校や園での子どもの様子と取組を伝え、支援内容を理解してもらう。その上で、保護者から子どもに支援の必要性を伝えてもらう。
 - ・子どものつまずきの背景を明らかにし、指導の参考にするために知能検査を提案する。
- 5 具体的な子どもへの伝え方
 - ×「漢字を書くの苦手だね。通級指導教室で教えてもらおう」
 - 「漢字を思い出せなくて困っているよね。一人一人漢字の覚え方って違うから、あなたに合った覚え方を探すために、通級指導教室の先生と作戦会議をしてみよう」
 - ×「イライラすると友達とケンカになるから、〇〇先生に教えてもらった方がいいよ」
 - 「身体の調子が悪いときにお医者さんに相談するときあるよね。それと同じように、気持ちのこと、考えること、頑張り方のことも、専門の先生に相談すると楽になれるよ」

誰でも自分の弱さには、目を向けたくないものです。特に思春期の子どもは他者との違いを認めたくない気持ちが強いです。子どもに自己理解や行動調整を促すには、安心して相談できる人、その気にさせる人が必要です。人は必ず変わる。その気になれば！



とれたて直送便



【「げし」の反対は？】

ある4年生の国語の時間。先生が「夏至の反対は？」に、子どもたちは「しげ」と答えました。周囲の大人のくすくすと笑う姿に、おかしいと気付いた子どもが「冬至」と訂正しました。気付くことは学びの入口です。ちなみに、私は「疲労」の反対語を「休養」だと思っていましたが、正解は「活力」です。では疲労を取るためにはどうしたらよいのでしょうか。休むのではなく、軽く運動することで体力が回復し、元気になります。（学びました！）